

緣起說開展史上に於ける三性說

石川良昱

佛敎が印度思想一般と同じく自我論にその觀點を置き、人生問題の解決の上の根本的な實踐的要求として禪定的修行を採用し、不安なる人生の支配力としての業から脱して以て不變不動の境地に安住せんことを理想としながら、遂に、これを超越し得たのは、佛敎が釋迦牟尼世尊といふ最大最高なる歴史的人格者の體験的保證の下に、即ちその自覺、説法、行動に基礎を置くといふ意識の上に成立したといふ確信からであらう。佛敎は後には種々に變遷したけれども、その思想の根底を流れるものは常に佛であり法であり、緣起であり心であり中道であつて、佛陀の體現實證せられた無上なる知見より必然的に等流せられたものであるから、その何れでもこれを徹底的に推しつめれば遂にそれら全體に關するのであるが、「それ緣起を見るものは法を見、法を見るものは佛を見る。」と云はれてゐるよう、緣起觀が法觀の中心であつたことは争はれぬ歴史的事實であらう。

然らば「緣起を見る」とは如何なることであらうか。緣起法とは、義説として述べられてゐる十二の緣起支の一々の解釋と共に、所謂「此有故彼有、此起故彼起、謂緣無明行乃至純大苦聚集」なる法説が擧げられてゐるのであるが、之は更に、此有故彼有が因緣法として「謂緣無明行緣行識乃至如是如是純大苦聚集」と説かれてゐると共に、又一面に於て、「謂無明行若(諸)佛出世若未出世此法常住法住法界、彼(諸)如來自所覺知成正等覺爲人演說開示顯發」

すとせられるところの縁生法に於ても、「謂縁無明有行、乃至縁生有老死」として十二縁起支についての同じ様な内容が示されてゐるところを一見すると、全くその何れが眞の見縁起なるか、その異別の必要さへも明確にし得ないのである。何れが明知見であり何れが無明の見であらうか。

雜阿含⁽³⁾によるならば、無明とは所謂の無知であり、眼耳鼻舌身意に於て、或は五受陰に於て、それがそれぞれ無常であり生滅法なることを如實に見ず知らず無常ならざること、明とはそれを「六觸入處に於て如實に知見し、明覺悟慧、無間等なる」に名づくる名である。即ち縁起とは、「此れ有るが故に彼有り、此れ起るが故に彼起る」といふ凡ての現象の相依相待、相互依存の關係であり、その十二の名數も「彼の諸の如來が自ら此の法を覺して等正覺を成じ、諸の衆生の爲めに分別し演説し、開發顯示せられ」たものであり乍ら、「我が所作に非ず、亦餘人の作にも非ず」して「佛の出世不出世に拘らず常住する」ものであり、凡ては無常であつて（諸行無常）、人生の苦樂もこの無常である諸法の所産である以外に別にその自性なし（諸法無我）と如實に知見するところに縁起を打ち破つて之を空に歸せしめた一切皆空の當體に解脱したところが即ち⁽⁴⁾。

十二因縁常相續起無生如實見不顛倒無生無作非有爲無住無爲非心境界寂滅無相

として「以是故、見十二因縁即是無上道具足法身」が語られるのである。義說法説を説くのは、自作自覺の常見に墮し、或は他作他覺の斷見に墮することから離れしめ、中道に於て說法せんがためであり、こゝにも見ゆる如く、空を體得するといつても決して虚無絶滅に歸することではない。「若し無明ならば前相を爲すが故に諸惡不善の法（無慚無愧・邪見・邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定）を生ずるも、若し明起らば前相を爲すも諸の善法（慚愧隨生・正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定）を生ずる」のであり、世俗にして有漏、生住異滅にして有爲なる内覺の若苦若樂不苦不樂は、出世間にして無漏、不生不住不異不滅にして無爲なる内覺のそれとなり、眞空妙有、凡ては自主活動の中に入られ、縁起そのまゝが自由として轉換して來るのである。

かゝる原始根本佛教の極意は大乗佛教に於ても一貫してゐるのであつて、相當に變遷し複雑化した瑜伽唯識の教學もそうした緣起觀の發展した結果と見るべく、手近には偏依圓の三性説に於ても、これを明確に認めることが出来ると思ふ。即ち、唯識三性説は、迷悟といふ立場から、緣起説に關する各種の類型のうち、特にその典型的形態たる二緣起説を、識を中軸核心とした十種緣起を立場として、言ひ得るならば論理的に展開せしめた一説明形式であると考え得るのであつて、差別せる森羅の萬有は、その體性を求むれば悉く因緣所生のものであり、これを依他起性と呼ぶのであり、それを無明の知見によつて迷の立場から見た時には偏計所執性、明の知見によつて悟の立場から如實に觀すれば圓成實性と言ひ得よう。

一心に基いて緣起の法則を如實に知見することが佛教に於ける解脱觀の真髓であり、人生に對する中道的批判の結論である上は、佛教を根本的に理解するの用意として、その發達の背後に土台として豫想される心觀の發達が密接不離の關係にあるといふことを忘れることは出来ないであらう。即ちこゝでは緣起觀の開展史上に於ける三性説の位置について考察するために、緣起説から唯識説へ發展してゆく論理的な根據をめぐつて若干考えてみたいと思ふのである。

註① 中阿含經、卷第七、(三〇)象跡喻經(正藏一、四六七、a)。佛說稻芋經(縮藏、宙七、五五右)。

② 雜阿含經、卷第十二、第十六經(正藏二、八五頁a—b、二九八經)。

③ 卷第九、二十二經(正藏二、六〇頁、b—c、二五一經)。卷第十、第一經、(同、六四—五頁、二五六—八經、及び卷第廿八、第二經(同、一九八頁)など。

④ 正藏二、八五頁b、雜阿含卷第十二、二九九經。

⑤ 縮藏、宙七、五五丁右、佛說稻芋經。

⑥ 正藏二、八五頁c、雜阿含卷第十二、三〇〇經。

⑦ 同 一九八頁b、雜阿含卷第廿八、七四八經。

⑧ 同 五六頁a、同右、卷第八、二二九經。

二

數多き原始阿毘達磨の論書の中、それらの綜合とも見るべき大毘婆娑論に依るならば、受化者の爲めに世尊によつて施設せられた緣起説の代表的な形式が、(一)、一切有爲法を總じて緣生法なりと觀する一種緣起説をはじめ、(二)、因と果との二種緣起説、及び、(三)、これを三世の中に各々有りとする六種緣起説、(四)、三世の別をいひ、或は煩惱(無名・愛・取)と業(行と有)及び事(餘支)とする三種緣起説があり、又、(五)、現在の八支を無明・行及び生と老死の四に攝入する四種緣起説と、之を逆に(六)、過去未來の四支を現在の八支に攝入する八種緣起説、(七)、前際の七支を愛・取・有・生・老死の五に攝入する五種緣起説と、その逆の(八)、後際五支を前際の七支に攝入する七種緣起説などあり、更に(九)、大因緣法門經に説く九種緣起説、(十)、城喻經に説く十種緣起説、(十一)、智事即ち發智論に見ゆるが如き十種緣起説、及び(十二)、原始契經の多くが傳える最も廣説された所謂十二緣起説、以上の十二種類が擧げられてゐるのであるが、今、便宜上、更にこれらをその趣旨とするところに隨つて區分してみるならば、無明(即ち惑)に基點を置く立場から説くところの云はゞ無明本説(又は惑本説)——これに對して明を立脚點として説く明本説も考へ得る——と、もう一つ識を中心とし基點として説く識本説、との二つ又は三つの説き方があると思ふ。而して前掲せる十二種の緣起説の中で、城喻經に説くが如しとせられる十種緣起説こそ明かに識本説の立場をとるものとして、こゝに注目したのである。

即ち、雜阿含經第十二に見えるところの城喻經によるならば、

我憶宿命未成正覺時、獨一靜處專精禪思、是三念。何法有故老死有、何法緣故老死有。即正思惟生如實無間等。生有故老死有、生緣故老死有。如是有取愛受觸六入處名色、何法有故名色有、何法緣故名色有。即正思

惟如實無緣等生。識有故名色有、識緣故名色有。我作是思惟時、齊識而還不能過彼。謂緣識名色、緣名色六入處、……如是純大苦聚集。

と記されてゐるのであつて、識を限りとしてそれ以上に過ぎずとするこの齊識而還不能過彼の語に極めて注意さるべきは云ふまでもなく、即ちこの十種緣起が所謂の識本説の立場に立つものである。

ところが十二緣起支の中に於ては、六處即ち内外の六處として、略に解する場合内が六根、外が六境、合せて十二處となり、具さには内の六處（能緣）の中に能所を分つて六識と六根それに外の六處（所緣の對境）としての六境とで十八界を形成し、名色即ち五蘊と合して所謂の三科となり、かゝる三科の體系を背景にして根を所依とする識が境に觸れるのであつて、最後支である老死から逆に遡つて名色に至るまでは色心二法が等分に扱はれてゐるのであるが、第三支の識支では次の名色即ち五蘊の第五の識蘊のみとなつて居り、識に對する色蘊及び受想行の三蘊はその姿を消してその前に第二の行支と第一の無明支とが先行している、即ち無明に緣りて行あり行に緣りて識ありと説かれて居るのであるが、これを識本説の立場から無明と行との二支を識として取扱ふならば、萬法唯識と道破せられる如く識より一切の色心諸法を展開することになり、これがやがて唯心論又は少くとも唯心論的傾向をもつと考えられるに至つた理由であり又後に於て種子論が展開せらるゝに至つた所以の本據となると考えられるのである。

識は普通八識説でいふ前六識と解せられるが、この中前五識は眼根を所依とする眼識とか耳根を所依とする耳識とか云ふふうには、根と識とが所依と能依との關係に立つてゐる。しかしこゝで問題になるのは第六意識が依つて以て所依とする意根とは何かといふことである。

これに就いて攝大乘論に適切な解説がある。即ち「意（根）に二種あり」とし、「等無間緣の所依止となる無間滅の意識」（唯識教學の第八阿頼耶識をひき出すもの）と、「四煩惱（身見・我慢・我愛・無明）と恒に共に相應する染汚の意」（第七末那識）とを擧げて解釋し、八識説が建立される所以の過程を示してゐるのである。これを成唯識論

によるならば、第七識を末那と名づける所以について、「彼（第八阿頼耶識）に依つて轉じて彼（第八阿頼耶識）を縁す、思量するをもつて性と相とも爲す、四煩惱と常に俱なり、謂く、我癡と我見と並に我慢と我愛となり、及び餘の觸等のごときとも俱なり」と説き、阿頼耶識を建てるに於ての論證中、阿頼耶と名づける所以を、「此の識には具に能藏と所藏と執藏との義有るが故に、謂く、雜染の與めに互に縁と爲るが故に、有情に執せられて自の内我と爲るが故に」と説かれて居り、第七末那識のために我なり我所なりとせられるが故に阿頼耶には執藏の義ありとせられ、無明に縁りて行ありと説かれるから、即ち雜染のために互に縁となる點について行は展開して阿頼耶識として取扱はれ、行を規定する無明は末那識として取扱はれて、「是の如き二法は展轉して相倚ること譬へば東蘆の俱時にして轉ずるが如し、若し此の識無くんば彼の識の自體は應に有るべからず」として、經に説かれて居る「識は名色に縁たり、名色は識に縁たり」の所以が解説せられるのである。

ところで八識のうち、眼等の前五識は五の相似の義（近くは略述法相義・上三）に依つて、まとめて前五識と云はれ外門に轉ずる現量であるが、第六意識は内外に轉じ、三世に通じ現・比・非の三量に通じ、名色及び六處支に尋いで觸・受等と開展せられるのであるが、此の二支に於ては、假りに此處に人があつて、根と境と識との三が和合して觸即ち認識を成ずることは説明出來ても、第六意識はたとへば極悶絶などの場合に於ては若干時の間意識が斷絶して無意識の状態を現することもあるから、即ち、以て與えられた刹那々々の認識は解説することが出來ても、一貫した生命はもとより、認識に基くその作用をすべて解することは出來ないのである。こゝに於て何かその奥に横たはるところの唯内門に轉じて而も恒と審とに思量する更に内面的な潜在識の何かを考えざるを得ない。恒審思量の末那識が考えられる所以である。然らば更に既に末那識によつて恒に審に思量して自の内我となすと云ふ自の内我とせらるゝものは何か。刹那々々に前滅後生して、恒に轉ずること暴流の如き阿頼耶識がこれであるとして、八識説の成立をみるのである。

末那識に依つて自の内我とせられる時は迷界を展開する本源總體となり、無明を滅して明知見に住した時には、轉識得智して大圓鏡智となり悟界を展開するのである。

註① 第二四卷、雜蘊第一中補特伽羅納息第三之二、正藏二七、一二二、a—b。

② 長阿含經卷第十、(二三)大緣方便經、(正藏一、六一頁b)及び中阿含經卷第廿四、(九七)大因經、(正藏一、五七八頁b以下)参照。

③ 正藏二、八〇頁、b—c、(二八七)。又、城邑經とも呼ばれる。中阿含經卷第一に七法品城喻經第三と名づくる一經を存するがこれは同名異經で關係はない。なほ、法賢奉詔譯の佛說舊城喻經が縮藏方等部宙七、四〇左以下に見られるがその内容は雜阿含のそれと略々同様のものゝように思ふ。

④ 註②の佛說舊城喻經にはこのところを唯此識緣能生諸行由是名色緣識と述べてゐる。なほ、玄奘奉詔譯の緣起聖道經(縮藏宙七、三七左以下)、支謙譯貝多樹下思惟十二因緣經(同上、三九丁)にも同様な教説を見出すことが出来る。

⑤ 增一阿含經卷第三十一、第四經(正藏二、七一八頁a—c)によるならば、十二緣起の生觀滅觀を説いた後、時復生此念、此識最爲原首、令人致此生老病死、然不能知此生老病死之原本として城喻を以てこれを示し、更に、無明起則行起、行所造者復由於識、我今以明於識、今與四部之衆而說此本、皆當知此原本所起、知苦知集知盡知道念使三分明、以知三六入則知生老病死二六入滅則生老病死滅。云々と説いてゐる。

⑥ 正藏三一、一三三c、(玄奘譯)。

⑦ 成唯識論、卷四、一二丁右。

⑧ 成唯識論、卷二、一二丁左。

⑨ 成唯識論、卷三、三四丁右。

⑩ 雜阿含經卷第十二、二八八、(正藏二、八一頁b)に、譬如三蘆立於空地、展轉相依、而得堅立、若去其二亦不立、若去其三亦不立、展轉相依、而得堅立、識緣名色亦復如是、展轉相依、而得生長。と見えてゐる。

三

普通には、心意識は、心は集起の義に、意は思量の義に、識は了別の義にあてられ、この心と意と識とを「但だ名

異なるのみにして義は同じ」と執して同體論をなすところから、攝論に所謂有餘師（俱舍論など）に於ては六識説しか考えられてゐないのであり、これを一々の別體として見るところから唯識八識説が成り立つて來るとせられるのであるが、以上に於て大凡説明した如く、識本説の立場に立つて十二緣起支を解する時には、そこに自ら論理的歸結として攝大乘論や唯識論に見る八識説が展開せられることが解せられるであらう。即ち三性説などの所謂唯識の教學體系は、識を基點とし中軸核心とした十種緣起説の立場に於て、十二緣起支をより論理的に考察をすゝめた形に於て解説したものであり、「緣起を見るものは法を見る、法を見る者は佛を見る」といふ聖言の如く、以て群迷をして佛道に入らしめんとしたものと思ふのである。

註④ 攝大乘論本卷上、依止勝相中衆名品第一、正藏三一、一一四、c。